

## 南相馬市社会福祉協議会における活動経過

2011年3月11日に発生した東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所の事故により双葉地方はもちろんのこと、当南相馬市も20km圏内、30km圏内、30km圏外とに分断され対応に苦慮したことは否めない。

発災当時は、避難民の対応と施設利用者の安全確保に努め死傷者をだすことなく対応できたことはよかったと思える。

翌日には、原子力発電所の水素爆発により追い打ちをかけるように小高区民は避難を余儀なくされた、原町区は屋内退避となり鹿島区は圏外で無指定となるが南相馬市民は全員避難との指示で3月17日には施設に避難していた全員を市が用意したバスへ搭乗させることができた。

また、民生委員による安否確認の調査を翌日から始まったが被災を受けた民生委員もいたため、民協会長と在住する委員とが連日調査を行い集約したことは後の行動に繋がったものと考えられる。

職員も一時避難ということになり幼児や学童を抱える職員や未婚の職員については3月13日以降順次60km以上離れるように話した、国が指定した30kmの根拠がわからないこと、東電職員に聞いていた60km以上は離れないと危険であるということを出したので職員には知らせたものである。

鹿島区においては、4月1日より災害ボランティアセンターを立ち上げるが運営方法はわからず資材はスコップ1丁と1輪車1台のみで身動きが取れない状況であった、そのような折に支援P派遣の米沢氏が夕方に来訪され災害ボラセンの運営について手ほどきを受ける、まったく白紙の状態から基本を享受され、ボランティアの受け入れについては準備が整ったものの必要とする資材はなくホームセンターなども閉鎖され入手が困難であった、そのような折に新潟の災害ボラセンより電話にて必要な資材はないかと連絡を受けた、資材は何もなく購入することもできない由を伝えると明日スコップ100丁と1輪車50台を届けるとの朗報を受け安堵した、その後は栃木や埼玉など各方面より災害時に必要な資材が届き十分な資材の支援を得ることができありがたかった。

初期時点では、ボランティアの数は原町区へ集中していたようであり、鹿島区には少なく10~20人程度であった、その後は順調に来訪され平均すると40~50人程であろうと思える、そのような中に土木技師と建築技師が毎日のように訪れて、地元の若者5人にいろいろと瓦礫撤去の手ほどきを伝授してくれた、地元の若いボランティアが毎日のように活動することが技師たちの心を動かしたようでその後は8月まで毎月毎週仲間を連れて来訪し鹿島区はほぼ終了となった、その後もいろいろと支援してくれた。

原町区においては概ね1ヶ月遅れで屋内退避が解除され本格的に活動が始まったもののボランティアが仕切っているような光景が見受けられたものである。

大震災時には、あらゆる機能が麻痺するため連絡手段も絶たれてしまい文明の利器も

役に立たない、日頃から震災に備えておくことの重要性と他市町村職員や他県から職員の応援が運営上不可欠と思えるので今後も連携していくことが大切と思われる。

鹿島区の第一デイサービスセンターと保健センターに避難していた全員も 8 月上旬には退去し応急仮設住宅へ入居した、8 月から応急仮設住宅への支援を開始するために生活支援相談員を配置し訪問活動と集会施設を利用したサロン活動などを開始する。

避難者の中には、心のやり場がなく相談員に八つ当たりする場面もあったが時間が経過するごとに落ち着きを取り戻しているように思える、当初は応急仮設住宅を中心とした活動であったが、借り上げ住宅に避難している市民もいることからそちらも支援しなくてはならない、さらに市外へ避難している市民もいて広域に支援しなくてはならない状況にある、ここで障害となったものは個人情報保護法であり、行政からの提供に時間がかかるということである、法の改正を行うとのことだが国民を守るための法が震災においては障壁となった、教訓とすべき事項であると思える。

福島県は宮城県や岩手県と違い原子力災害が大きく立ちはだかっている、当南相馬市は隣接市であるため対応が極めて難しい状況にあり、某総理大臣がいうように終息はしていないのが現状である、小高区においてはようやく仮置き場が決まり集積できるようになったが一部の地域である、先の見えない状況に失望感が大きいことはわかる由だが 3 年目を迎えた今年は特に注意を払った活動が必要になるといわれる、遅々として進まぬ復興活動と避難生活に疲弊している市民が多く、長引くことにより精神状態が不安定になりつつある、すでに新たな家屋を求めて市外へ転居した人達もいるが応急仮設住宅から離れることができない高齢者には早く復興住宅を建設し転居させることも重要に思える、隣接の相馬市では早々と復興住宅が完成し報道されると一層の不安感も増してしまうように思える、相談員は訪問活動やサロン活動の中から様々な問題を提起されるようになってきている、相談員自身が重い負荷を担うことになってきている、このことは相談員に対しても心のケアが必要になってきていることから、専門機関の協力を得るなどして対応しているが個人それぞれに思考が違うため難しいところがある。

避難民も様々で新たな生活に向けて歩み始めた人は大きな問題はないように思われるものの、まだ被災者意識の強い人もいて対応に苦慮するところである、若年層世代が少なくなり働き手がどこの職場でも不足する事態を招いている、復興を果たすには若い世代の帰還が必要であると思えるが現状では極めて困難であるといわざるを得ない。

過去の大きな災害とは状況が違い過ぎるということが双葉地方や南相馬市のおかれている環境である、今後半世紀にわたり原子力災害の後遺症は続くものと思われ長期の支援策を模索することになると考える、相談員の活動もその時々により変わっていくと思うが、対応策は未知数であるから後手に回らないようにしなくてはならないと思う、今後の活動について、相談員のスキルアップは当然にはあると思うが、現在行っている活動をいつまでも同じように続けていては意味が薄らいでしまうものと思える、ここに参会の皆様方から将来へ向けての知恵を拝借できれば幸甚に存じます。